

仮定された結果を説明することが遂行行動に及ぼす効果

Effects of Hypothetical Explanation on Task Performance

大 坪 靖 直

Yasunao Ohtsubo

This study was designed to examine the effects of explaining hypothetical outcomes for one-self on actual behavior. Sixty students were randomly assigned three conditions. In an explain condition, subjects first imaged hypothetical failure on an upcoming puzzle task. They then stated a reason why they failed it. In an image condition, they imaged same result without explaining it. In a control condition, they neither imaged nor explained hypothetical failure. Then all subjects asked to state explicit expectation for the task, and performed it.

Results suggested that the effects of explaining hypothetical outcome involved the effects of imaging it.

Sherman, Skov, Hervitz, & Stock (1981) は、これから行う言語課題について仮定した結果（成功／失敗）の因果的な説明を求めると、現実の遂行成績が説明を求めた結果と対応することを報告している。彼らは、この現象の生起過程を次のように解釈している。たとえ仮定された結果であっても、その説明を求められると、その結果と関連した自己の特性を検索しなければならない。その結果、仮定された結果に関連した自己の特性が顕在化され、仮定された結果が現実を生起するだ

うという主観的生起確率が高められる。すなわち、仮定された結果が本当に生起するだろうという自己期待が形成され、その期待に一致するように現実の行動を調節するのである。この生起過程を図式化したものが Fig. 1 である。

仮定された結果の因果的な説明をすると、その結果と対応した遂行成績が生じやすくなるという現象は、以下の2つの研究によっても検討されている。Campbell & Fairey (1985) の研究では、自尊感情要因を導入して検討した結果、自尊感情の高い人に失敗の説明を求める条件を除き、この現象が再確認されている。また、大坪 (1992) では、成功説明の効果は検証されなかったが、失敗説明の効果は検証され、部分的にこの現象が確認されている。

さて、この現象を検証するために従来の研究で用いられてきた基準は、一切の説明を求めない統制条件におかれ、この統制条件と、成功説明を求める成功条件と、および、失敗説明を求める失敗条件との比較によって現象の生起が判断されている。ところが、説明条件では、仮定された結果を説明させるために、説明を求める前に仮定した結果を被験者に想起させることから、これらの条件間には仮定した結果を想起することに起因する効果（イメージの効果）が交絡していると考えられる。イメージの効果とは、仮定した結果には評価的な望ましさが含まれているので、その生起理由

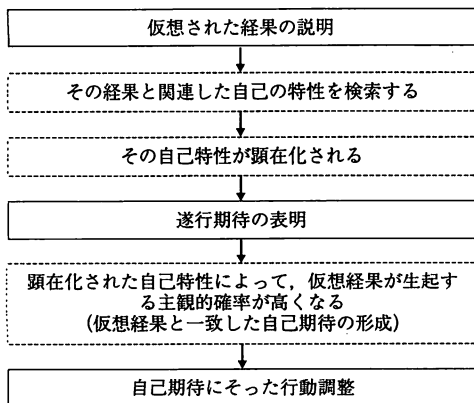


Fig. 1 仮想結果の説明が遂行行動に影響を及ぼす過程

の説明を求めなくとも、その結果をイメージしただけで自尊心や気分などに影響を及ぼす可能性が考えられる。

そこで、本研究では、従来の統制条件に加え、仮定した結果を想起するだけでその結果が生じた説明を求めないイメージ条件を新たに設け、仮定した結果を説明することが遂行行動に及ぼす効果を再検討する。

方 法

被験者 大学生60名（男性21名、女性39名）。

手続き 失敗説明条件、失敗イメージ条件、統制条件の3条件に被験者を無作為に割り当て、個人ごとに実験を実施した。まず、全被験者に18項目からなる自分自身のパーソナリティ評定（例えば、よく早合点をする、論理的な方など）を実施し、パズル課題（Fig. 2 参照）の説明と練習課題を行った。パーソナリティ評定は、仮想結果の説明を求めるときに自己に注意を向けさせるための操作である。

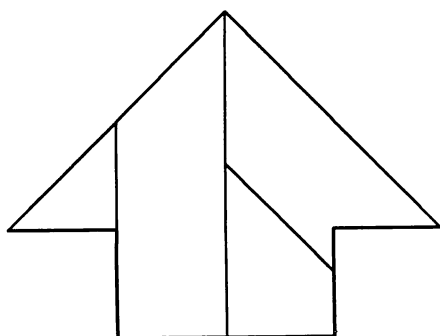


Fig. 2 実験で用いたパズル課題

そして、失敗説明条件の被験者には、これから行う課題に失敗したと仮定して、自分の失敗の原因を3分間で記述するように求めた。失敗イメージ条件の被験者には、これから行う課題に失敗したと仮定し、自分が失敗したシーンを3分間イメージするように求めた。なお、統制条件では、仮想結果とその説明およびイメージに関する指示は一切行わなかった。

つぎに、全被験者に、これから行うパズル課題の成功率を0～100%で回答させた。その後、完成図（50%縮小）を提示して、実際にパズル課題

を15分間で遂行させた。この時、課題達成までの時間をストップ・ウォッチで測定した。なお、制限時間内で完成できなかった者には、課題を中断させて、正解を示した。

課題終了後、能力、課題の困難度、努力、運の各々が自分の課題成績にどのくらい影響を与えたと思うかを9段階（大きい影響を及ぼした～全く影響なし）で回答させた。最後に、本研究の真の目的を詳しく説明し、これから実験に参加する被験者には詳しい実験の内容について内密にしておくよう指示した。

結 果

遂行期待 仮想結果の説明およびイメージによる遂行期待の違いを検討するために、1要因分散分析を行ったところ、主効果が有意な傾向を示していた ($F_{(2,58)}=2.40, p \leq .10$; Fig. 3 参照)。そこで、HSD法による多重比較を行った結果、失敗イメージ条件の被験者は統制条件の被験者よりも低い遂行期待を持っていたことが示唆された。

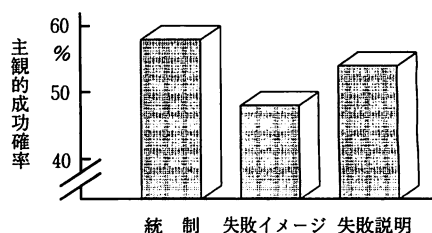


Fig. 3 各条件におけるパズル課題についての主観的成功率の平均

遂行成績 仮想結果の説明およびイメージによる遂行成績の違いを検討するために、各条件における課題成功率を比較してみたところ、著しい条件間差は見られなかった（Table 1 参照）。

そこで、課題成功者のみを対象とし、課題達成

Table 1 各条件における課題成績

結果	条 件			計
	統 制	失敗イメージ	成功説明	
成功	13	13	14	40
失敗	6	7	7	20
計	19	20	21	61

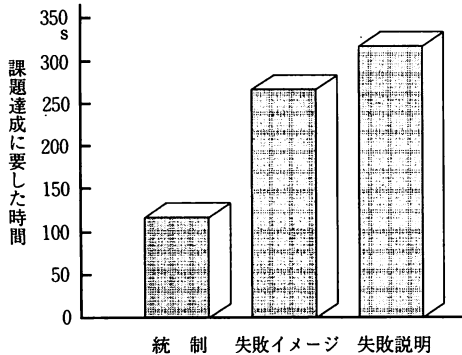


Fig. 4 各条件におけるパズル課題の達成に要した時間の平均

に要した時間 (秒) に対数変換を施し、各条件間の平均課題達成時間について 1 要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった ($F_{(2,37)} = 4.56, p \leq .05$; Fig. 4 参照)。そこで、多重比較を行った結果、失敗説明条件および失敗イメージ条件の被験者は、統制条件の被験者に比べて、課題達成までにより多くの時間を要していたことが示された。

原因帰属 能力、課題の困難度、努力、運のそれぞれが、自分の課題結果にどの程度影響を及ぼしたと思うかという原因帰属について、各条件間の違いを検討するために、各々 1 要因の分散分析を行ったところ、いずれの帰属カテゴリーについても有意な主効果はみられなかった (Table 2 参照)。

考 察

純粋に仮定された結果であっても、その結果の説明を求めると、現実の遂行成績が仮定された結

Table 2 各条件における帰属量の平均

条 件	帰属カテゴリー			
	能 力	困難度	努 力	運
統 制	5.81	6.71	6.62	5.48
失敗イメージ	5.30	6.30	6.95	5.10
失敗説明	6.37	6.68	6.32	5.58

果の方向へ変化するという現象には、Sherman et al. (1981) が指摘する生起プロセスの他に、仮定された結果を想起することによる効果が交絡している可能性は否定できないと考えられる。課題のタイプや成功のケースなど、より多様な状況設定の下でのさらなる検討が必要であろう。

課題成功率については条件間の違いが見られなかったが、課題達成者における達成時間については予想された方向の条件間の違いが認められたことから、本研究においても、仮定された結果を説明することが現実の遂行行動に影響を及ぼす現象は生起していたと考えられよう。課題成功率において条件間の違いが見られなかった原因の 1 つとして、本研究で設定した課題時間が長すぎたことがあげられる。課題達成までの平均時間に違いが認められたことから、もっと短い適切な時間設定を行えば、課題成功率においても条件間の差異が認められると予想される。

ところで、本研究および大坪 (1992) では、遂行期待について、仮説から予想されるパターンが明確に確認されなかった。仮定された結果の説明についての詳しい内容分析は行っていないが、本研究の被験者が失敗の理由としてあげていた原因は、体調や単なるつまづきといった不安定なものが多かった。このことが、遂行期待の不安定さに影響していると考えられる。

引 用 文 献

- Campbell, J. D. & Fairey, P. J. 1985 Effects of Self-Esteem, Hypothetical Explanations, and Verbalization of Expectancies on Future Performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1097-1111.
- 大坪靖直 1992 仮想結果の説明が課題遂行に及ぼす効果 福岡教育大学紀要, 41(4), 279-282.
- Sherman, S. J., Skov, R. B., Hervitz, E. F., & Stock, C. B. 1981 The Effects of Explaining Hypothetical Future Events: From Possibility to Probability to Actuality and Beyond. *Journal of Experimental Social Psychology*, 17, 142-158.